

自己評価報告書

平成23年 4月 26日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20320093

研究課題名（和文） 身分感覚の比較史的研究

研究課題名（英文） A Comparative Historical Study on the Sense of Social Status

研究代表者

岸本 美緒 (KISHIMOTO MIO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：80126135

研究分野：東洋史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：比較史・身分制

1. 研究計画の概要

本研究は、東アジア、ヨーロッパ、及び中東イスラーム地域を中心として、「身分感覚」に焦点を当てた新たな視座から比較歴史学的考察を行おうとするものである。従来身分制度研究の中心をなしてきた経済的・法制的な観点からではなく、人々が、しぐさ、言葉遣いなどを通じてどのように相互の社会的地位を認知し、それに応じたふるまいをしてゆくのかという観点から、身分の存在形態を考察する。絵画などのヴィジュアル資料や小説などの文学作品にも注目しながら、それぞれの歴史社会の「身分感覚」を再構成し、相互比較によって、身分研究の新たな領域を開くことをめざす。研究分担者個人の研究を進めつつ、定例の研究会及び年一回程度のシンポジウムを通じて、比較史的考察の深化と発信を行う。

2. 研究の進捗状況

(1) 平成20年度から22年度にかけて、定例の研究会（合宿を含む）を9回開催し、研究分担者、連携研究者の報告を中心に、討論を行った。定例研究会には、本研究のメンバーのほか、若手研究者・大学院生も参加した。

(2) 平成21年度に、シンポジウム「比較名望家論の可能性」を開催し、トルコ史研究者の永田雄三氏を招き、新著『前近代トルコの名士』における比較名望家研究の提言を中心として、集中的な討論を行った（岸本による同書の書評が『歴史学研究』に掲載された）。平成22年度には、国際シンポジウム「ジェントリの起源——日本の武士と比較して——」を開催し、英国カーディフ大学のピーター・コス教授を招聘し、その講演を中心とし

て、コメントと討論を行った（その記録は平成23年度中に刊行の予定である）。

(3) そのほか、個々のメンバーが個別のテーマに即して、研究を進め、論文・学会報告等の形で発表を行っている。

上記(1)(2)(3)の活動を通じ、個別の実証的な研究が進められると同時に、地域的な相違のみならず世界史的な共時性にも着目した比較史の視座について、認識が深められつつある。本研究計画以外の他の身分制研究グループとの間にも対話が進められている。

3. 現在までの達成度

現在のところ、「②おおむね順調に進展している」と評価できる。

「比較史」という点でいえば、研究会やシンポジウムを通じ、単に地域的に異なる個別事象を並列する「比較」にとどまらない、比較史的分析の方法について、認識を深めることができた。このような比較の方法をより明示的な方法論として打ち出すとともに、そうした方法論を中核とする求心的な共同研究の成果を具体的な形でまとめることをめざし、現在準備中である。

「身分感覚」というキーワードについては、個々のメンバーの個別研究のなかにそうした問題関心が生かされつつあるが、今後、文学・思想などの方面の研究者との対話をより密接に行っていくことが予定されている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 平成23年度の研究会・シンポジウムの予定は、以下の通りである。

①研究分担者による定例研究会は、日本近代、日本古代、ヨーロッパ現代をテーマとして、3回開催する予定である。昨年度までの研究会では、主に中世、近世について比較史的な討論が行われ、興味深い結果が得られたが、古代及び近現代において、同様のアプローチがどの程度適用可能なのか、ということは、それ自体興味深い課題である。

②国際シンポジウムとしては、平成23年7月に、お茶の水女子大学の国際日本学シンポジウムの共催という形で、「文学の中に身分感覚を読み解く」という題のパネルディスカッションを予定している。台湾から中国史（唐宋時代）の研究者を招聘し、近世日本、近世ヨーロッパ、明清中国の報告とあわせて、討論を行う予定である。同時に、歴史学研究者と文学研究者との対話をもめざす。

③年度の後半に、本研究計画の総括としての位置づけをもつシンポジウムを開催する予定である。

(2) 共同研究の成果の出版については、以下を予定している。

①平成22年度に開催した国際シンポジウム「ジェントリの起源」の報告・コメントをもとに、お茶の水女子大学文教育学部比較歴史学コースで発行している学術誌『お茶の水史学』の別冊特集号を刊行する予定である。

②本研究課題の成果として、論文集の刊行を準備する。

(3) 以上のほか、個々の研究者が各自の研究領域において関連の研究を行い、学会報告や専門誌への投稿という形で成果発表を行う。

以上、(1) (2) (3) の方策を組み合わせ、共同研究としての具体的な成果の公開を行うとともに、この共同研究を通じて得られた知見を個々の実証研究へとフィードバックすることを通じ、長期的な見地から、研究方法の深化や視点の豊富化に寄与することをめざす。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

- ① 岸本美緒「明代的応考資格と身分感覚」黄寛重主編『基調と変奏』国立政治大学歴史系、2008年、257-281頁(査読無)。
- ② 井上和枝「朝鮮時代士族女性の儒教的教養とその主体的内面化」『国際文化学部論集』(鹿児島国際大学)9巻4号、2009年、1-18頁(査読無)。
- ③ 古瀬奈津子「敦煌書儀と『上表』文」『敦

煌・吐魯番出土漢文文書の研究』財団法人東洋文庫、2009年、67-82頁(査読無)。

- ④ 岸本美緒「清初の『文武相見儀注』について」『東洋史研究』68巻2号、2009年、92-121頁(査読有)。
- ⑤ 岸本美緒「冒捐冒考訴訟と清代地方社会」邱澎生他編『明清法律運作中的權力与文化』聯經出版公司、2009年、143-173頁(査読有)。
- ⑥ 神田由築「近世の身分感覚と芸能作品」『お茶の水史学』52号、2009年、123-137頁(査読無)。
- ⑦ 神田由築「近世・近代移行期における甲府の遊所」『年報 都市史研究』17号、2009年、10-23頁(査読有)。
- ⑧ Toru Miura, “Continuity and Discontinuity of Damascus from the Mamluk Period to the Ottoman Rule,” *Proceedings of the International Symposium on Bilad al-Sham during the Ottoman Era*, Istanbul: IRCICA, 2009, pp.23-33, (査読無)。
- ⑨ 岸本美緒「『老爺』と『相公』——由称呼所見之地方社会中的階層感」張国剛他編『新近海外中国社会史論選訳』天津古籍出版社、2010年、106-127頁(査読無)。
- ⑩ 岸本美緒「明清期の身分と日本近世の身分」『部落問題研究』195号、2011年、8-22頁(査読無)。
- ⑪ Toru Miura, “The Salihyya Quarter of Damascus at the Beginning of Ottoman Rule,” in P. Sluglett ed., *Essays in Honour of Abdul-Karim Rafeq*, Leiden: Brill, 2010, pp.269-291 (査読無)

[学会発表] (計2件)

- ① 井上和枝「朝鮮後期における家門の由緒創出」九州史学会、2008年12月14日、九州大学。
- ② Toru Miura, “A Comparison of Islamic and Chinese Societies: Ownership, Contracts, and Market,” The 8th Asian Federation of Middle East Studies Conference, Beijing, September 25-26th, 2010.

[図書] (計3件)

- ① 安田次郎『日本の歴史 第7巻 走る悪党、蜂起する土民』小学館、2008年、366頁。
- ② 安田次郎『寺社と芸能の中世』山川出版社、2009年、91頁。
- ③ 神田由築『江戸の浄瑠璃文化』山川出版社、2009年、102頁。